

『1596年、エドモンド・スペンサー氏により
ユードクサスとアイリニーアスの対話の形で
書かれたるアイルランドの状況管見』(6)

水 野 眞 理 訳

はじめに

本稿は、エドモンド・スペンサー（Edmund Spenser）のアイルランド統治論 *A View of the State of Ireland, Written dialogue-wise, betweene Eudoxus and Irenaeus, By Edmund Spenser Esq. in the yeare 1596*（1633）の部分訳である。これに先立つ部分は5回にわけて、本誌および『文学と評論』誌に掲載した。

この文書の全体は、アイルランド統治の不首尾の原因を分析する前半と、アイルランド統治徹底のための策を提案する後半からなっている。今回訳出した部分は、後半の最初にあたる部分で、イングランドの支配に抵抗するアイルランド勢力の鎮圧のために、駐屯軍を置くことと、敵勢力を飢餓へと陥らせることを提案している。また、スペンサーが初めてアイルランドに渡ったときに秘書をつとめた総督グレイ卿に関し、残酷だという世評に対する反論も展開している。

翻訳の底本には、これまでの5回の発表と同じく、この文書の初版であるウェア（James Ware）編 *Two Histories of Ireland*（1633）を用い、ハドフィールド&メイリの編集による版（1997）と、手稿から編集された集注版（1949）

を参照した。官職などの歴史的名称の訳語は、松村・富田編著『英米史辞典』（研究社）および田中英夫編『英米法辞典』（東京大学出版会）を参照した。原文はパラグラフ改行のないベタ打ちの印刷であるため、長い台詞は訳者の判断で適宜改行を施した。また、内容によって括弧内に見出しを入れた。訳注のうち（HM）と付したものはハドフィールド&メイリ、（Ware）と付したものはウェアによるものである。

（改革の必要性）

アイリニアス まったく君の言うとおりに。ともあれ、これで僕らの第一部であるアイルランド統治におけるすべての悪習と弊害を語りつくしたから、今度は第二部、つまりそれらを治癒し、矯正する手段に進もう。そしてそれらの悪習や弊害が起きてきた初期状態に戻すようにつとめよう。

ユードクサス そうしてくれたまえ、アイリニアス。というのも、君の話をずっと聞いてきて理解した限りでは、アイルランド統治の規則と制度とは、統治が敷かれた最初の段階で既に設計ミスがあって、それ以来、他の過誤もあつたりしてますます歪みが高じ、現状のような混乱に至った、というのが君の考えらしい。まるで、二本のそれた線は、延ばせば延ばすほど離れていくように。

アイリニアス ユードクサス、こういう統治が長引けば長引くほど、アイルランドは悪い方向へ行くということが僕には分かるし、君も言うように、そう確信している。というのは、まず僕が述べたような弊害をすべて取り除いて、時代遅れになってしまったものを全て（いわば）新しい型にはめて鋳直すのでない限り、いくら公正な手段と平和的な計画によってそういう悪を正そうと奮闘努力しても、無駄骨に終わってしまうからだ。というのは、それ以外のやり方はどれも、一つの穴に継ぎを当てようとしてもっと多くの穴をあけてしまうだけの、骨折り損になるだろうから。というのは、アイルランド人はかつてイ

ングランド人に征服されて¹ 全ての家産から追い出されてしまったものだから、あらゆる改革とイングランド人への服従を強く嫌悪しているのだ。だから、今でも彼らは、もしもう一度征服されれば、同じように全ての土地から追い出されるだろうと恐れている。これが彼らのイングランド人統治憎悪のもとなのだ。「ヒトハ恐レルモノヲ嫌ウ」と諺にもあるように²。だから、今や改革はより強い力をもってするのでなければならない。

ユードクサス しかし思うに、それは現在の不具合を全て正すために、よき法を作り、新しい制定法を取り決め、厳しい罰則と刑を課すことによってできるだろう。君が考えるように、いわば全てを白紙にもどして、統治の形態をすっかりかえてしまうことによってでなく——それがいかに危険な試みであるか、君自身も認めざるを得ないはずだ。アイルランド政策を掌握している政治家たちも、もっともな理由なしには変革を恐れてしり込みするはずはない。というのも、変革というものはすべて危険であって、たとえよかれと思っても、なんだかんだと事故や恐ろしい出来事が邪魔に入って、すべてを水の泡に帰しかねない。

アイリニアス もっともだ、ユードクサス。確かに、事態が鎮静化していて、そのままの状態が続くことが確実というよう場合なら、すべての変革は避けなければならない。しかし、ことアイルランドに関する限り、我々が目にするのはその逆で、日々我々にのしかかる問題は大きくなる一方だし、悪が悪の上に重なって、いまやまともに落ち着いた地域などない。それどころか、アイルランド人たちは全員耳をピンとたてて、一斉に蜂起してイングランドへの従属を脱ぎ捨てようと合図を待っている。いやもうその準備は整っている。というの

1 イングランド王ヘンリー2世の侵攻(1171年)を最初の征服と見なしている。それに対し、エリザベス朝における征服は再征服、と呼ばれる。

2 エンニウス(Quintus Ennius c259-c169BC)の句。エンニウスはローマ詩の父とされるが、その作品は断片としてしか残っていない。キケロが『義務について』(De Officiis)の第2巻23節でエンニウスからの引用としてこの句を用いている。

は、蜂起の合図は既に発せられていて、ただ実行の契機を待っているだけなんじゃないかと僕は思うのだ。その契機とは、ある要人³の死で、その人は女王陛下と国家に忠実に仕え、南の海岸を監視して予測されるあらゆる悪の侵入を阻止し⁴、その勢力で恐怖を与え、不動の忠誠の堅さを見せつけて自分の支配下の臣民を掌握してきたのだが。

だから、君はしかるべきまともな法律が欠陥を是正し、改革すると思っているだろうが、それはどうしても考え違いなのだ。というのは、法律を守る気のある者も、法律を破ったらどうなるかその危険を恐れる者もないところで法律を作っても何の意味もない。とにかくアイルランド全土はまず改革されなければならない、しかるがのちにはじめて、その改革された国において守られ、維持されるべく法律がつくられなければならない。

ユードクサス では、アイルランドの改革は法律と規則によるというのでなければ、どうやって始めたらいいいというんだ？

アイリニアス まさに剣によってだ。何らかの善が植え付けられる前に、強い手でもってまずこれらの悪が切り取られなければならないからね。たとえば、木によい実をならせようとすればまず枯れた枝や腐った大枝を刈込み、いやらしい苔をきれいにこそげとってやらなければならない、そのように。

ユードクサス じゃあ君は、僕がカーン（軽装歩兵）、ホースボーイ（馬丁）、カロウ（博奕打ち）を殲滅したいといったときは過激だといっておきながら、自分だって同じ荒療治を処方するというのかい。どんな悪に対して用いるにせ

3 この要人とはエセックス伯か、またはオーモンド伯だと考えられている（HM）。エセックス伯（Robert Devereux, 2nd Earl of Essex, 1565-1601）は、1599年、自ら望んでアイルランドにおける国王代理となり、Nine-Years Warに臨むが失策を重ね、女王の指示をまたずにイングランドへ帰国した。オーモンド伯（Thomas Butler, 10th Earl of Ormond, 1531-1614）はエリザベス1世の従兄にあたるアイルランドの大貴族で、プロテスタント。

4 カトリック国スペインからアイルランドへの援軍を阻止することを指す。

よ、剣というのは最も過激な矯正手段じゃないか。

アイリニアス たしかに。ただ、他に方法が考えられないとか、回復の希望が持てないとかいうときには、過激な手段を使わざるを得ないんだよ。でも、君が殲滅したいと言っているごろつきどもに関してそういうやりかたがだめだと言ったのは、彼等はこれから君に話す別のやりかたで矯正できるだろうからね。

ユードクサス 僕がいう絞首索、君がいう剣、その一点を除いては、君のやりかたは君が批判したやりかたと実質的に同じじゃないか。どこが違うというんだ？

アイリニアス それが大いに違うんだよ、ちゃんと君が理解すればね。僕が「剣」といったのは、なにもアイルランド人全員を剣で切り捨てるという意味じゃないんだ。そんな殺伐としたことを考えたり、血も涙もないことを願ったりするのはまったく僕の趣味じゃない。僕が「剣」と言うのは、君主の勅許を得た軍事力のことだ。それが最大の勢力を誇るまでに伸長して是正し除去すべきなのは、悪に染まった人々ではなくて、先に僕が批判した種々の悪なのだ。悪に染まった人々は、よき規則と統治によって改善されうるものだが、悪それ自体は悪なのであって、善になることはないからだ。

(軍事制圧と国庫支出)

ユードクサス では君の考えを詳しく話してくれ、それらの悪の全てを改革するのに君のいう「剣」とやらをどう使うのか。

アイリニアス まず手始めは、強力な軍隊をアイルランドに送り、武器を構えて抵抗している叛徒や、徒党をなして森に陣取り善良なる臣民から略奪しているごろつきどもを全て、それによって力づくで制圧することだ。

ユードクサス 前に立ち塞がるやつらを片っ端から踏み潰して、強情なアイルランド人を這いつくばらせる、そんな軍隊を派遣せよなんて、女王陛下に対し

てとてつもない出費を君は言い出しているよ、アイリニアス。実際現在のところ気を抜けない無法者はたった一人、すなわち広範囲に武装勢力をもつティロウン伯⁵だけなのに、彼一人に対するために、女王が兵員の派遣、食糧調達、戦いながらの進軍といったことにこの一年でどんなに莫大な出費をされたことか。それでも達成されたことはほとんど無に等しく、女王の金庫は空っぽ、臣民は疲弊し、あわれな国土は混乱している。いっぽう敵はこれまで同様服従を拒み、外面だけでも服従したふりすらなく、実際服従など全くしていない、それどころか陛下の力をあなどり、頑強な反乱軍を強みにして、君主たる女王に対しやりたい放題の他の同様な不埒な反逆者どもを煽る結果になっている。だから、そんな不確かな結果しか見込めないことに、女王の莫大な出費をあおぐのは無茶な進言というものだ。

アイリニアス たしかに結果が不確定なのであればそのとおりだが、この場合の効果の確実性は疑いを容れないものであるから、どんな議論によっても論駁できないだろうし、この（僕が求める）派遣軍の費用は、過去2年間の戦争で無駄に費やされた費用に比べて、べらぼうに増えることはないだろう。というのは、請け合ってもいいが、これまでで既に20万ポンドが女王陛下の国庫から出ているし、現在陛下が遂行しておられる攻撃の費用は月額1万2千ポンドだ。それらを合計したらどうなる？ それでいて、効果はゼロだ。これだけの資金を正しいやり方で用いていれば、僕がこれから述べるような効果を上げられたはずなのに⁶。

5 ティロウン伯 (Hugh O'Neill c1550-1616) アイルランド北部アルスターを拠点として勢力を振るい、九年戦争では反イングランドの旗頭となった。

6 アイリニアスの試算は不正確ではなく、論証はでたらめではない。1595年9月に、[大蔵卿代理] サー・ヘンリー・ウォロップが軍事費を月額1万2千ポンドと試算している。ティロウン伯を打倒するためにかかった費用は総計約200万ポンドで、これはエリザベス晩年の出費の中でもっとも大きなものである。アイルランドからの歳入は年額3万ポンドであった (HM)。

ユードクサス　すると君はその資金をただ兵士の給料や糧食に使えばよかったですともいうのか？

アイリニーアス　ああ、そうとも。ところが、現在は一気に使ってしまうのではなく、長期に引き伸ばして使われている。まず今は2万ポンド送り、次の半年に1万ポンド、という風だ。するとその間、兵士は糧食と受け取るべき給料に事欠き、飢えて消耗してしまう。その結果、やってきたときは元気で能力もあった1,000人の兵士のうち、半年後には500人も残っていないというありさまだ。それでも女王の出費は少しも軽くならず、即金で支払われない分が借金として計上されると、長くは未払いのままにはされず支払われる。というのは、配下の兵士の半分は死に、4分の1は召集に応えないか現れない、という指揮官⁷でも、まもなく人数分満額の支払いを要求してくる。するとお偉い方々の口利きで、あるいはまた別のお偉い方々の士官や従臣とひそかに利益を折半するというやり口で、その指揮官は未払い分を受け取るのだ。それは未払いの満額よりはずっと少ないが、彼が受け取るべき正当な額に比べればはるかに多い。

ユードクサス　確かにこれは国費の適切な管理とはいえないな。というのは、使う必要のある金なら、必要十分な額だけを一回で使い切るほうがよい。長く遅配を続けて業務を滞らせるだけで何の節約にもならない、という状態よりはね。でも、アイリニーアス、女王の国庫はこういう多大な出費の際に（そして実際最近陛下はそういう出費をせまられておられることはよく知られているが）、そんな金額をぽんと出せるほど、資金の用意が潤沢にあるわけではないんじゃないか。逆に、今のようにちびちびと出費していくことで陛下の国庫への負担が軽減され、女王の財布が一気に貧しいものになることを避けられる。そのよ

7 中世以来の軍隊の基本ユニットはカンパニーであり、国王などから代理権を与えられた指揮官（captain）がこれを指揮した。当時のアイルランドの軍事においては、事実上政府・総督の支配の及ばない指揮官の自由裁量が横行していた。（Brady 148）

うに時間差を作ることで、出て行くと同時に日々入ってくるものがあるからね。アイリニアス 君の言うとおりかも知れない。しかし、こういう立派な方針をとるためならきっと、(我々庶民が覗くわけにはいかないが)もし女王の金庫の蓄えが足りないなら、いまやアイルランドという惨めな領土が自分たちの背中に重荷になっているのを感じているイングランドは挙国一致して、その重荷を少しでも除去できるならと、今回に限って骨折りをするだろう、そして肩と手と心を差し出してその費用を喜んで、進んで負担するだろうと確信するよ。それにその費用は、いずれしかるべき時がくれば分かるだろうが結果として伴う女王と国家全体にとっての無限大の利益に比べれば、事実上、無に等しいのだ。

ユードクサス 君の腹案を実施するのに、いったい何人ぐらいの兵士が必要だと思う？ そして彼らをどのぐらいの期間養うつもりだ？

アイリニアス 正直に言って1万の歩兵と千の騎兵。それを長くても1年と半年だ。というのは、その後は作戦の激しさが軽くなれば雇用する兵の員数を減らし、これから言うような別の食料調達法をとるからね。

ユードクサス 確かに君の要求する員数は大したものではないし、期間も長くない。ただ、その兵員をどう使うつもりなんだ？ 君のいう軍隊を敵[ティロウン伯]のいるところまで率いて行って、こちらと矛を交えてくれるように探し出すとでも？

(駐屯軍の布置)

アイリニアス いや、ユードクサス、そんなことはしない。というのも、やつは足の速い敵で、森や湿地に身を潜め、そこから必ず狭隘な通路や危険な浅瀬へと姿を現す⁸。そういうところをイングランド軍がどうしても通らざるを得ないと分かっているからね。そこで待ち伏せして好機到来と見るや、通行に難儀しているイングランドの兵士に危害を加える。だから、常に動き回っているティロウン伯を探し出したり、なかなか見つかりさえしない彼を追ったりするのは無駄で無益なことだ。僕ならそれより、駐屯兵をティロウン伯の縄張りには分散して、彼をもっとも効率よく悩ませることができると思う場所に配置するね。

ユードクサス でもアイリニアス、そんなに少数の兵力でどうやってそんなことができるんだ？ だって、君も知っているとおりに敵は一箇所に固まっていないで、アルスターにいくらか、コナハトにいくらか、そして残りはレンスターに、とちらばっている。だからこれらの場所の全てに強力な駐屯軍を置こうとすれば、君の案よりははるかに多くの兵員が必要となるだろう。また、駐屯軍を一箇所に集めて、他の地域を裸にしてしまうと、そこは敵の蹂躪にまかせることになってしまう。

アイリニアス 僕は、敵の最強の地域に、こちらの主力を駐屯させ、敵の最

8 浅瀬 (ford) の軍事的意義は小さいものではない。それはアイルランド人にとっては格好の攻撃地点、イングランド人にとっては危険な経路であった。この記述は1580年に総督であったグレイ卿がウィックロウの谷グレンマルーアでオバーン (O'Byrne) の反乱軍に敗北した事例、または九年戦争 (1594-1603) 初期の1595年6月にバグナル将軍に率いられたイングランド軍が森と沼に富むアルスターのクロンティブレトでティロウン伯ヒュー・オニールの奇襲攻撃を受けて大敗した事例が意識されているかもしれない。また、その3年後 (九年戦争中) 『管見』の執筆よりは後の事例であるが、同じバグナル将軍率いるイングランド軍がアーマーのイエローフォードでティロウン伯に大敗し、バグナルも戦死している。

弱地域にこちらの残りの兵力を駐屯させたいと思う。例えば、今最強と見なされているのはティロウン伯だから、彼に対して8,000の兵力を駐屯させる、フェア・マクヒュー・オバーンとキャヴァナー族に対して1,000の兵力、そして残りの1,000をコナハトのいくつかの地域に駐屯させて、総督がこれを指揮する。ユードクサス 君の兵員配置は分かった。しかし、駐屯軍が命に即応して作戦につけるようにするには、どこに配置するのがいいと思うか？ 僕はそれらの地域のことをあまり知らないかもしれないが、アイルランドの地図を出して目の前におき、(君の話を書く間) 自分の目を自分の教師として、君の計画の是非を判断するための指針としよう⁹。

アイリニアス アルスターに置く8,000の兵は4分割して、各駐屯軍に2,000ずつあるようにし、それを次のように配置する。ブラックウォーター川¹⁰沿いの適切な場所に、できるだけ川から高い位置に、一隊を置く。次の一隊はカーズリファー¹¹かその付近に配置し、フォイル湖¹²までの[フォイル]川沿いのすべての通路を支配させる。第三隊はファーマナ¹³かバンドロイズ¹⁴

9 ゴットフリートによれば、この文書を書くに際しスペンサーが参照したのは、ボアジオ (Baptista Boazio) のアイルランド地図 (1580) と推測される。

10 このブラックウォーター川は、アイルランド南部のヨールで海に注ぐ同名の川ではなく、北部アルスターのネア湖に注ぐ川で、ティロウン伯ヒュー・オニールの勢力分野内にあった。

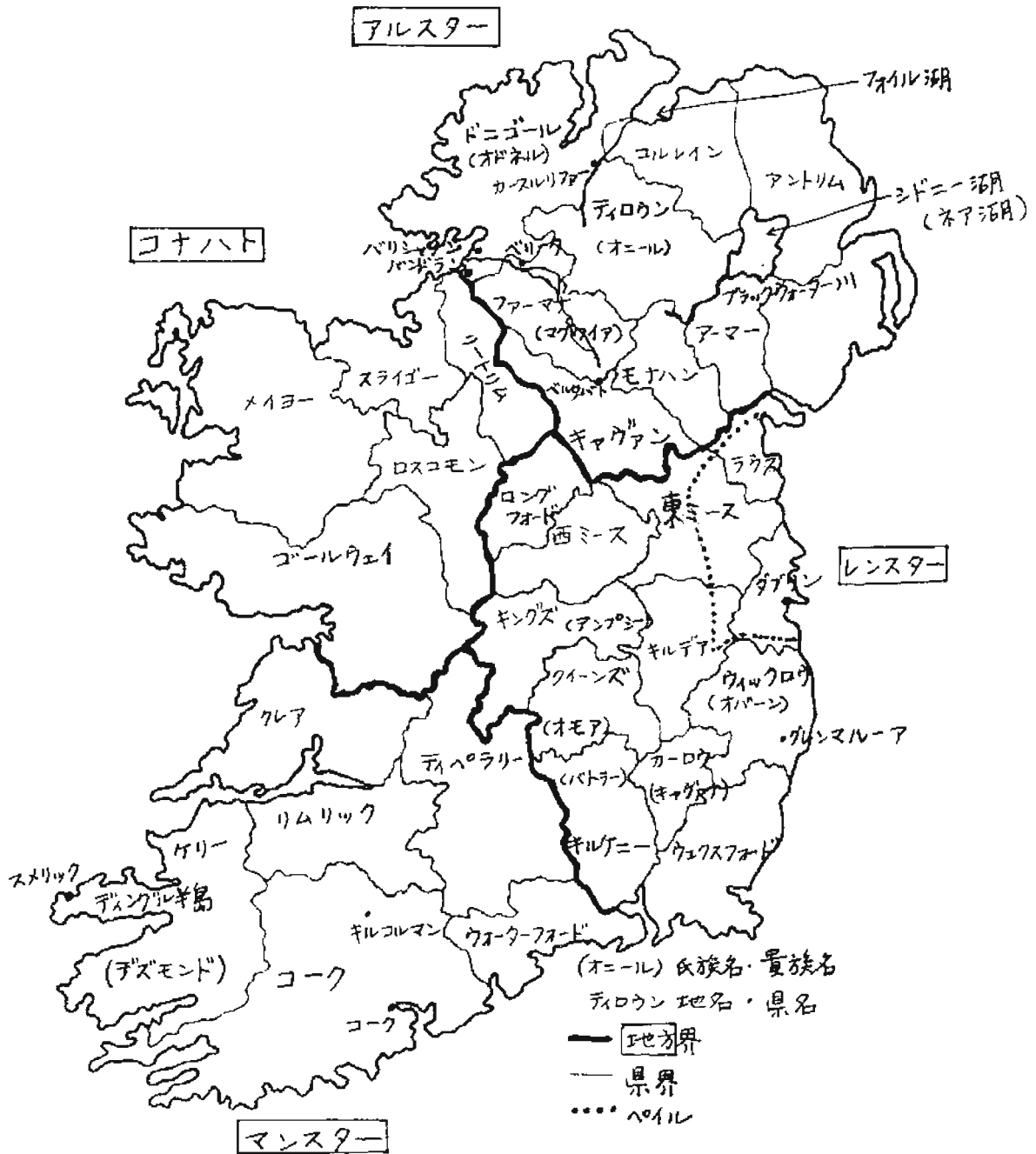
(HM)によれば、スペンサーは1581年8月に総督グレイ卿のアルスター軍事作戦中、ブラックウォーター要塞を訪れたかもしれない。駐屯軍を展開させることが対アイルランド戦に勝つ方策である、というアイリニアスの提案は、後に国王代理マウントジョイ男爵チャールズ・ブランツがヒュー・オニールを降伏させた軍事行動に実現することになった。

11 不詳。フォイル湖に注ぐフォイル河畔にある要害の地リフォード (Lifford) のことかもしれない。

12 フォイル湖はアルスター北辺で北海に繋がる湖。

13 北部アルスターの内陸部の地域で、当時はマグワイア (Maguire) 家の領地。

14 ドニゴール湾南岸のバンドラン (Bundoran)。



スペンサー時代のアイルランド

に配置する。それはコナハトとアルスターの間に置くことで、事態に合わせてどちらの地域にも行動できるようにするためだ。この隊は他の三隊よりも強力なものにしたい、というのはその隊は最も強くされ、最もよく使われることで、ボールズシャノンとベリック¹⁵、および付近の通路の守りを固めさせられるように。最後の一隊はモナハンカバルタバト（ベルタバト）に配置し、その両地域の敵に対峙するとともに、キャヴァンとミースに睨みを利かせてを浮浪者どもの通行を阻止する。たいてい浮浪者どもはこのあたりの地域から出てきて、しばしば悪事を働くものだから。これら2,000ずつの歩兵駐屯軍の各々に対し、200の騎兵をつける。というのは歩兵と騎兵は互いにどちらが欠けても、戦力にならないからだ。

この4つの駐屯軍をこのように配置して、僕の案では予め半年分の糧食を与えておくのだ。糧食が腐敗したりよくあるように捨てられたりすることを考えると、それはやめた方がよいと君に言われそうだがね。しかし、船はたいてい1年分、時には2年分の糧食を積んでいくのだから、彼らだって同じように糧食を与えられてもよいのではないか。とりわけ、海上でよりは陸上でのほうが糧食の保存も容易だし。パンは小麦粉の形で持たせる。そうすれば常に必要に応じて焼けるだろう。ビールも時に応じて現地で醸造すればよい。牛肉は予め樽詰めにして、必要なときだけ用いればよい。というのは、生鮮食料はときには敵から現地調達できるはずだと思うからだ。これに加えて、駐屯軍にはタイツと靴、その他兵士に必要なだろう備品を与え、海のこちらからの救援物資を待たなくてもよいようにし、供給が切れて困ることがないようにする。この補給の問題は国王代理にとって軍一つを引率する以上に苦勞の種であるということがこれまでアイルランドでよくあったし、また救援に向かう者も危険にさらされてきた。というのは、敵は救援物資が輸送される通常のルートを知っ

15 バリシャノン（Ballyshannon）とベリーク（Belleek）はアーン川下流の二地点であり、コナハトとアルスターの地方界に近い。

ていて、たいてい、そこへ一直線に向かう道へと進路をとり、しばしば補給隊に危害を加えて悩ませる。そればかりか、(半年に一回の補給に切り替えれば)護送のために付けられる兵力に対して支払われる給料、馬車の費用、地元のぼったくり、などが浮く勘定だ。半年ごとに、国王代理自ら手勢を率いて物資を届ければ、国王代理がこれらの駐屯軍を順々に訪問して閲兵し、変更の必要なものは何か、適切な物資は何かを知り、国王代理が最善と考える補給を行うことができる。

さらに、これら4つの駐屯軍が、敵の情報、諜報を入手して都合よく攻撃に出れば、敵をあちらからこちらへと動かして、テニスボールのように駐屯軍の間を追い回せる。その結果、敵は自分の家畜の群れを飼っておく安全な場所を失い、自分自身の隠れ場所すら失い、火から飛び出して水へ落ちるように、一難去ってまた一難、遠からず自らの主たる食物である家畜の群れも食い尽くすか、追い回して死なせてしまうか、森にいるために牧草に窮して飢えさせてしまうかし、敵自らも勢いを失って、そのような悲惨さに耐える気力も体力も失う、そういう事態が短時日のうちに生ずるだろう。そうやって一冬も追い回していれば、敵は足を掬われて、二度と立ち上がれなくなるはずだ¹⁶。

(飢餓作戦)

ユードクサス ということは、君の考えでは、アイルランドでの軍事行動には冬が最適だというわけか？ ではなぜ、通常夏にわが国の殆どの作戦が行われ、軍隊が率いられるのだろうか？

アイリニアス それは誤解だよ。というのは、アイルランドの事情は他の国

16 これこれ推奨されているアイルランド人を飢えさせることによって降伏へと追い込む戦術は、焦土作戦とともに、16世紀末のアイルランドに対してイングランドがとった典型的な方法である。

の事情とは違うんだ。他所では戦争は夏にもっとも激しく戦われ、降り注ぐ日差しの中かでヘルメットがぎらぎらと輝いている。それに対し、アイルランドでは、冬が最も作戦に適しているのだ。というのは、カーンたちにとって身を包むものとも家ともなる木々が、冬には葉を落として裸になっている。彼らにとってベッドとなる大地は冷たく湿っている。大気は身を切るように冷たく、カーンたちのむき出しの脇腹や脚を刺すように吹き付ける。雌牛たちたちは仔を孕まず、彼らにとっての唯一の食べ物であるミルクも出さない。牛を殺しても肉も取れず、殺さずに飼っていても、餌を与えられないだろう。しかもカーンたちは（たいてい）仔牛を連れていて、それを追ったり連れまわしたりする中で、仔牛をすべて捨ててしまい、次の夏まで飼っていれば利用できるはずのミルクも失ってしまう。

ユードクサス 君の議論はよく分かった。だが、失礼ながら、無法者に関しては別な見方もあること耳にしているよ。つまり、彼らは夏には大人しくしていて、冬になると活動を始めるのだ。夜明けになる前に安全に戻れるよう、夜が最も長い時期に、焼き討ちだの略奪だのを最も盛んに行うというよ。

アイリニーアス 僕も同じようなことを聞いたことがあるし、その真実性を証明する事例を見たこともある。ただそれは、マンスターとか、ペイルに接する地域などの人口稠密なところに住んでいる不法な連中、たとえば、フェア・マクヒュー、キャヴァナー族、モア一族、デンプシー一族などのことなんだ。というのは、彼らにとっては、冬は（君もいうように）夜が一番長くて暗く、しかもあたりの土地は収穫した穀物がどっさりあって、どこへ行っても蓄えを奪取できるから、略奪や強奪には最適な季節なのだ。ところが、ある地域をまるまる勢力下に収めている屈強な敵の場合はまったく逆なのだ。というのは、こういう連中は数は少なく、秘密の仲間によって隠れ家を与えられ、辺鄙な村や、森や山に近い一角に匿われていて、彼らはその仲間に略奪品や盗品を持ち込み、その仲間から持続的に密かに救援物資を受け取っている。しかし、自ら招いたり我が兵士の手によったりして自領の全てを荒廃させられ裸になった敵は、ど

こにも助けを求めることができなくなる。略奪できる町などない、すべて火をかけられているから。パンもない、夏の間には農業ができないから。畜肉はある、しかし家畜を冬に殺してしまうと夏に飲むミルクがなくなり、命が危うくなる。というわけだから、一冬しっかりと追い回しさえすれば、翌夏には殆ど何もしなくてもよくなる。

ユードクサス なるほど、敵にも色々あることがよくわかったし、冬が作戦に最も適していると納得できたよ。併せて、敵がこちらに注目していないときに、敵のやり口を真似てこちらの有利なチャンスをうかがって突然攻撃をかけるという君の作戦の手順も理解できた。そうやって敵をすばやく包囲し、決して長時間休ませないことにより、敵は遠からず勢いを失い、ひどい窮地に追い込まれると考えざるを得ない。この作戦を遂行して敵を窮地に追い詰めた時点で、もし敵が投降してきたり、退却しようとしたりしたと仮定すれば、君はどうすればよいと思う？ 投降を受け入れようと思うかい？

(投降者の扱い)

アイリニーアス いや、思わない。ただ、戦争の初期段階で、駐屯軍がしっかり定着して防備も固められていたら、一帯に次のような布告を出して、敵に知らしめてもらいたい。すなわち、20日以内に完全降伏しようと思うものは誰でも（当の首領たちや頭たちを除き）恩赦を与える、というものだ。これらの駐屯軍を置けば直ちに、敵の大半は大変な恐怖と身の危険とを叩き込まれて、首領からの離反を願うようになるだろう。そして、（デズモンドの乱で実例を見たのだが）¹⁷ 反逆者たち自身も、老人、女子供、（チャールと彼らが呼ぶ）百

17 デズモンドの乱を見た、ということは、アイリニーアスが書き手スペンサーの分身であることを示唆している（HM）。デズモンドの乱とは、南部マンスターの実験を握っていた大貴族デズモンド伯（Gerald FitzGerald, 14th Earl of Desmond 1533-83）を中心とする反乱（1579-83）。

姓などの役に立たないばかりか食料を食い尽くして戦力にならない下層民を放逐するようになるだろう。それでも、家畜だけはきっと別にして手放さないだろうがね。だから、戦略的には投降してきた敵を追い返して他の反逆者たちをも消耗させ苦しめるのが定石だが、憐憫の情から投降を受け入れてもらいたい。もともとこれらの下層の連中はほとんどが自発的な反逆者ではなくて、その気もなかったのに大物の反逆者によって軍事行動に引きずりこまれ、大きな流れにさらわれたようなものだからだ。もし逆らっていれば、持てるものすべて、そしてその命までも失う破目に陥っただろう。今や下層民はそれら〔財産〕を現地で使うつもりで反逆者のところへ運ぶのだが、何しろ相手は屈強な反逆者だから、すぐに身ぐるみ剥がれるのが落ちだ。だから下層民の困窮振りは憐憫に値するのだ。

同様に、もし反乱軍の中の有力な男たちや紳士階級の男たちが軍から離反してきて、(連中の中にはこっそり家畜を盗むやつらも必ずいて) 家畜も連れてくるから、と申し出てきたら、敵を無力化するという目的で彼らも受け入れてもらいたい。しかしそれでも、彼らがほんとうに言葉通りの行動を取るのか、完全に服従するのか、の点をよく確認し、また投降してきた敵がその地域や駐屯軍の周りにとどまることを禁じ、二度と徒党を組んだり、その気になればまた戻ってくることをしないよう、アイルランド内陸部に移住させて散らばらせるというのが条件だが。というのは、どうせ連中は、このまま置いてくれば農業もします、収穫や家畜の大部分を駐屯軍の隊長に差し出します、などと言い出して、これまでさんざんイングランド政府軍をたぶらかしてきたのだが、もし彼らに駐屯軍の近くにとどまり、そこに暮らすことを許しでもしたら、(僕は経験で知っているが) その後ずっと駐屯軍にとって心痛と苦勞の種になるから、彼らもたらす利益で彼らの害が帳消しになるなんてありえない。というのは、(とどまった) 連中は遠くへやられた味方をひそかに助けるだろうし、敵に密かに連絡をとって、駐屯軍が彼らに対して計画している作戦や攻撃のことを逐一知らせるだろう。彼らは遠慮なく密かに敵を引き込む、そうとも、ま

た要塞の弱点や不利な点があればそれを敵に密告して駐屯軍の要塞そのものを敵に売り渡し、結果的に駐屯軍全員の首が危なくなるようにする。そういうことやその他さまざまな問題を避けるためには、僕は彼らをここから遠く離れた他所の土地へ移してもらいたい。だから、一回の召喚ですぐに出頭して命に従うようにさせたいのだ。しかし、その後はいかなる投降者も受け入れず、彼らが運命のままに惨憺たる死を迎えるにまかせようと思う。その理由は、戦争のあともアウトサイダーであり続ける連中は屈強で頑固な反逆者どもで、どうしたって忠実で従順になるはずはないし、労働や市民生活をさせられるはずがない。いったん放縦な暮らしの味を知り、略奪と暴力に慣れてしまうと、その後もずっと同様の機会を狙っているから、矯正とか更正とかの望みもない。だから切捨てるしかない。

ユードクサス 確かに、自分自身の愚行を改める気がないようなそういう捨て身の連中には、何の情けもかける必要はないが、それ以外の連中には寛大な措置を——彼らにはもったいないほどの寛大な措置を——君は提案するというわけだね。それにしても、この度の戦争はどのような結末になるだろうか？¹⁸ というのは君は戦争の継続を短いものと予想しているから。

18 「この度の戦争」(this warre)はエリザベス朝における対アイルランド戦争中最大の九年戦争(the Nine Years War 1593-1603)を指す。イングランドによる支配に対する北部アルスターのオドネル(O'Donnell)一族とオニール(O'Neill)一族の反乱に始まり、南部マンスターへと拡大し、マンスター植民地が破壊された。当初はゲリラ戦法とカトリック国スペインからの援軍によりアイルランド側が優勢となった。エリザベス女王が投入したエセックス伯ロバート・デヴルーは16,000という大規模な軍を率いたが、マンスターに駐屯軍を置く作戦が失敗し、1600年、オニールとの停戦を受け入れる。戦争末期に国王代理マウントジョイ卿チャールズ・ブランドが小規模の駐屯軍をアイルランド各地に置くという作戦でイングランドが優勢となり、1603年オニール一族の頭領ヒューが降伏して戦争は終結した。スペンサーがこの『管見』と書いていたのは、九年戦争の前半にあたる。マンスターのキルコルマンに彼が与えられていた城は戦争後半の1598年に反乱軍による焼き討ちにあった。

(マンスターにおける飢餓の記憶)

アイリニアス 戦争終結は（請け合ってもいいが）ごく早期に訪れるだろう。それには大方の予想では大変な困難が伴う、と思われているが、それよりずっと早くだ。ただし、それは誰一人剣にかかって斃れるわけでもなく、兵士に殺されるわけでもなく、耕作が阻害され、家畜が放牧できなくなるという、厳しい抑制策によってたちまち食糧が底をつき、食い合いになるという形だ。

その証拠が最近のマンスターの戦闘で例証されるのを僕は見たのだ¹⁹。というのは、マンスターは穀物と家畜に溢れた実に豊穡な土地だったから、長く攻撃に耐えられるだろうと思うところだが、一年半も経たないうちに悲惨な状態に陥ってしまい、どんなに石のような心の持ち主も憐れをさそわれずにはおかないぐらいとなった。彼らは足腰も立たなくなって森や谷のあちこちから四つん這いになって出てきた。その姿はまるで死神の解剖図で、その話し声は墓場から叫び声をあげる幽霊のようだった。彼らは死体でも見つければ喜んで食い、そうとも、それからまもなく互いを殺して食い合うようになり、死体を墓から掘り出すことすら控えなくなった。そしてミズガラシやクローバーが生えているところを見つけると、いっときご馳走にでもあずかるようにそこに群がるのだが、そんなもので長く腹を持たせることができず、たちまち食べ物など無きに等しくなり、こうしてもっとも人口の多く豊かな土地から、突然人も家畜もいなくなってしまったのだ。しかしこの戦争中、剣にかかって斃れたものは多くなく、みな彼らが自らに引き起こした極端な飢饉によって死んだのだ。

ユードクサス 君の話は驚異だが、それがそんなに短時日に起こったことはさ

19 このデズモンドの乱に伴う飢饉の描写は、本書に言及するときにもっとも頻繁に引用される箇所であり、マンスターに居住していたスペンサー自身の見聞に基づいていると考えられている。この飢饉をアイルランド人が「自らに引き起こした」ものとしている点は、スペンサーの酷薄さを示すものとしてしばしば引きあいに出される。

らなる驚異だ。

アイリニアス それはまったく真実なのだ。そしてその理由もすぐに挙げられる。というのは、アイルランドの主力はカーン、ギャロウグラス、ストカー、騎兵、ホースボーイ²⁰、といった連中で、彼らは自分のものを持つ習慣がなく、他人のものを略奪して生き、それが味方のものであるであろうが敵のものであるであろうが、手当たりしだいに破壊し騒擾するばかりで何の遠慮もしないから。そしてもし、彼らが大きな略奪を行うとすると、根っから略奪が好きなものだから、後先も考えず彼らはそれを瞬く間に平らげてしまう。一方、彼らが食べ残したものは、[イングランド] 兵士が現地へ来て同様に略奪し破壊するから、反乱軍とイングランド軍の間ではすぐに何も残らなくなる。それでもこの戦争を早く終わらせるためには、この戦術を行う必要があるのだ。しかも、こういうやりかたでこのことを行うだけでなく、戦闘地域に境界を接する民は、退去させて遠くへ移住させるか、同様に持ち物を奪うかして、敵が彼らから助けを得られないようにしなければならない。なぜなら [イングランド] 兵士が残してやったものは、反乱軍が必ず略奪するだろうから。

ユードクサス 君の考えはよくわかったよ。しかし、すべてがそういう風に片づけば、多くの飢死者の悲惨な姿で一杯になり、豊かな土地が消耗し、大きな荒廃と破壊がもたらされることになり、君の話聞いて頭に思い浮かべるだけの僕でさえ、大いに哀れんでしまうよ。万一、この悲惨な状態や事態の嘆かわしい光景が神聖なる女王陛下に伝えられ、情感を込めて話されれば、陛下はもともと慈愛と寛大さに富むお方でこのような痛々しい訴えには大いに耳を傾けられ、陛下の哀れな臣民がこのような悲劇にあっているのをお許しにはならないはずだ。そういうことを陛下の周辺の誰かが陛下のお耳に吹きこむかもしれ

20 この中でカーン、ギャロウグラス、ホースボーイについては、既にアイリニアスはアイルランドの悪しき習慣の説明の中で触れている。ギャロウグラスはスコットランド人傭兵。ストカーは歩兵従者。

ないからね。陛下は恐らく、このような不幸なできごとに対する憐憫からこのような暴力的な方針をお止めになって、もとの寛仁へと回帰されるばかりか、このような残酷な計画を立案したり奏上したりした者には感謝などされないだろう。

(グレイ卿擁護)

だから先代のかの良きグレイ卿²¹の統治が、長い苦勞と色々身を挺しての尽力のお蔭で、事態を今君が言ったような状態へとほとんど持って行っており、改革の地ならしも出来て、女王陛下のお望みに適うものとなるどころだったのに、グレイ卿に対して、あの人は流血を好むとか、陛下の臣民の命を犬ほどにしか思わず、何もかもを荒らして消尽してしまい、あとに陛下が統治できるものといったら灰燼しかない、とかいった不満の聲が上がったのだ。すると陛下はさっそくそちらに耳を貸し給い、突然方針は逆転されてしまった。するとかの高貴な卿がたちまち非難を浴び、みじめな民が憐れまれ、新しい策が練られて、包括的な恩赦を受け入れるものには与えるべし、とされ、それまでの企画はすっかり白紙となり、総督は窮地に追い込まれ、女王陛下が長期にわたり莫大な出費してこられたことも全くの無駄となって撤回され、あと少しのところまで成功する、という望みまでもが遮られ、完全に挫折してしまったのだ。この

21 第14代グレイ・ド・ウィルトン男爵アーサー (Arthur Grey de Wilton 1536-93)。スペンサーはグレイ卿の秘書としてアイルランドに渡った。ヘンリー・シドニー (フィリップ・シドニーの父) の後任のアイルランド総督として1580年、6,000の兵とともにアイルランドに渡り、デズモンドの反乱を鎮圧。この行軍に、ウォルター・ローリーやスペンサーも同行したと考えられている。アイルランド南西部ディンゲル半島先端のスメリックにおいて、アイルランド人・イタリア人・スペイン人連合勢力の砦を襲い、投降した兵600を殺害したことで非難を浴び、1582年本国へ召還された。スペンサーがこの『管見』を執筆した頃にはすでに他界している。

ことの真偽は、君自身もよくわかっているだろう。

アイリニーアス わかりすぎるぐらいだ、ユードクサス。一層気の毒なのは、これほど記憶に残ることはないと思うからなのだ。それに、グレイ卿失脚の卑劣な企みや、グレイ卿ともう一人の貴族²²とのあいだに不和の種を蒔くことで、卿の失脚が巧妙に画策されたやり口の一部始終を僕が知らないはずがない。この二人の不和については、後になって両者が、実はまんまと騙されていたこと、それによってアイルランド政策の全体的変更が陰険にももたらされたことを知ったのだが、時すでに遅く、流れを変えることはできなかったのだ。というのは、この不和の間に、それまで長期の奮闘と多大な努力によって行われたことが(君も言うように)一瞬にして無に帰してしまい、また、この上なく穏やかで人当たりがよく、慈愛に満ち、節度あるかのよき卿が「血まみれ男」の汚名を着せられたのだから。もっとも、アイルランドの状況からして、どうしてもあのような暴力に訴えざるを得ず、そのことが卿の生来の気性を殆ど変えてしまったことはあるだろうがね。それでも、その他の点では、卿は流血を喜ぶなどありえず、しばしば復讐が当然の場面でもそれを許さなかったし、後に卿の批判者となった人々の中には、卿の大いなる慈悲のおかげで絞首台から救われたば

22 この貴族とは、エリザベス女王の従兄弟にあたる大貴族オーモンド伯トーマス・バトラー(1531-1614)のことであろう。トーマス・バトラーは宮廷でのグレイ批判の先鋒、グレイの総督職解任の立役者とみなされている(HM)。バトラー家はオールド・イングリッシュの一員ではあるが、プロテスタントであり、同じマンスターに勢力を持つフィッツジェラルド家のデズモンド伯とアイルランドにおける覇権を争った。

しかし、カムデン(William Camden)の『エリザベス女王時代のイングランドとアイルランドの事蹟の年代記』(*Annales Rerum Gestarum Angliae et Hiberniae Regnante Elizabetha*)の1580年の項によれば、サセックス伯(Thomas Radclyffe, 3rd Earl of Sussex)がグレイの大敵‘Sussexius infensor excitavit’²³と述べられている。サセックスはグレイより先に3回アイルランド総督に任命され、当時侍従長としてエリザベスの宮廷で力を揮っていた。

かりに批判者となった者もあったぐらいなのだ。

グレイ卿の方針とは実際にはこういうことだったのだ、つまり、卿は悪辣な行為や叛乱の頭目や主犯には、おもに見せしめのために、目こぼしをせず厳しい裁きを示した。そうすれば、たいてい同じ悪に染まっている下っ端の連中もみな、うまく行けば恐怖から改心し、救われるかもしれないだろう。だって、最近ペイルで起こった陰謀²³において、罰を受けた者よりもずっと多くの者に罪があったと思わないかい？ それでもグレイ卿は目立ったほんの一部を罰されただけだった。また、実に賢い人だった（らしい）から、その裁きにおいても、冷酷だとか、偏向した審理だとか、彼らの血を流したがっているとかいった非難を受けることを予想して、それをさけるように、見事な思慮深さと心遣いを示されたのだ。というのは、彼らの裁判に立ち会う陪審には、卿は被告自身のごく近親の者を選ばれ、裁判官は被告自身の父親たちや、伯父たちや、親友たちから選任され、その人々が被告たちを正当な判断から有罪としたときにも、その判決を滂沱の涙のうちに述べられた。それにもかかわらず、卿は流血好きで冷酷だと言われるのだ！

ユードクサス まったく僕もこちらの巷でそういうふうだと聞いているが、僕は（前からずっとそう思っていたのだが）それは卿に対して不当だったと思うよ。というのも、卿は常に実に校正で、誠実で、信仰心厚く、まさに高貴な方だと知られてきたし、噂されるような冷厳さや不公正からは程遠い方だからね。ただ、スメリックの砦におけるスペイン人への厳しい処刑については、僕は特に強調されているのを聞いたが、もしそれがあつた人の言うように真実だとすれ

23 Camden の *Annales rerum Agnlie et Hiberniae* の 1580 年の項を見よ (Ware)。

ここでアイリニアスが言及しているのは、1581年にニュージェント (Nicholas Nugent/Nogent) によって始動された陰謀を指している。ニュージェントは 1582年 4月6日に処刑された。英国の枢密院が裁判の差し止めを求めたにもかかわらず、グレイ卿は法の履行の停止を拒否した。エリザベス女王はグレイの行動を大いに不満としたとされる (HM)。

ば、それは卿の名誉を大いに減ずることになる。というのは、卿はスペイン人たちに命の保証をした、と言われるし、それ以外の人々も、少なくとも卿は命の望みを持たせた、としているから。

アイリニアス そのどちらの説もまったくの誤りだよ。というのは、僕自身誰よりも卿の身に近い所にいたからこれは請け合ってもいいが²⁴、卿は命を保証するとか、希望を持たせるとかされたことは全くなかった。敵の密使でイタリア人のジェフリー氏（とかいう名前だったと思う）が、猶予を求めて総督と交渉のために送られてきたが、グレイ卿は言下にこれを拒否された。そして後に敵の隊長ドン・セバスチャンが、兵士らしく武器を携えたままで、それが叶わないなら、戦争の慣行と諸国民の法²⁵に基づき少なくとも命だけは携えて退却することを許されるよう、懇願に来たときも、それは強く拒否された。そして卿自身からセバスチャンに対し直々に、戦争の慣行や諸国民の法など願い出る正当性は汝らにはない、なぜなら、汝らはいかなる法的な意味での敵でもないからであり、仮にそうであるというなら、ローマ教皇、スペイン王、その他誰のものにもせよ、いかなる委任を受けて他国の君主の領土へ戦争をしにやってきたのか、示されよ、と求められた。これに対し彼らは、自分たちはそのようなものは持たない、ただ外国で一旗揚げようとやってきた冒険者にすぎず、自分たちを喜んで迎え入れようというアイルランド人に立ち混じって参戦しに来たのだと答えた。これに対し、卿からは、デズモンド伯、およびジョン・デズモンドその他のアイルランド人自身が、そもそも法的な意味での敵ですらな

24 スペンサーがグレイ卿に同行してスメリックの事件を目撃したことの傍証と考えられる。

25 Law of nations の訳。国際法と訳されることもあるが、複雑化した近代の国際法 (International Law) の一部として、戦線布告なしの攻撃の禁止、休戦、和平、国境の遵守、難破船とその乗客／乗務員の保護、海賊行為の非難、戦争捕虜への尊厳ある扱い、在外公館、公使の保護、犯罪人引き渡し、奴隷使用と奴隷交易の禁止などが主たる概念である。

く、単なる叛乱者、反逆者にすぎないこと、従って、彼らの救援にやってきた者たちも、自らの国王からの許可状や委任状も持たずに来襲した以上、ならず者、反逆者にすぎないこと、従って、そのような悪党どもと条件交渉をしたりいかなる合意に至ったりすることも、女王陛下の名において卿自身の不名誉となるから、無条件降伏するか、拒むか、それは汝たちがどちらかを選べ、と申し渡された。これに対し、上記の隊長は自らの身と砦とその中の人員を完全に引き渡し、ただただ、慈悲を乞うた。しかし彼らの命を救えば、後にアイルランド人と合流する危険があり、また、これらの外国からの援軍によって鼓舞され、さらなる援軍の到来を期待しているアイルランド人の心胆を寒からしむるためにも、彼らに慈悲を示すことは賢明ではないと考えられた。結局、あのように彼らを即刻片づけるしか道はなかったのだ。だから、卿を悪しざまに言う連中は、まったく事実を反し、悪意に満ちて、かの実に公正かつ高貴なる方の聖なる遺灰を、中傷・誹謗していることになる。卿の英雄的な精神にあふれる、数多の最も優れた美德の中の、最も小さなものを備えようと思うさえおこがましい連中のくせに。

ユードクサス　ほんとうに、アイリニアスよ、君の話聞いてなにより嬉しいのは、たびたび人から質問を受けながら、これまでずっとそういう中傷者の口を塞ぐことができなかつた、その問題について、悪意に満ちた嘘をしっかりと暴いてもらえたことと、さらにこの知識が、さっき僕たちが話していた問題、つまりアルスターとコナハトの叛乱者どもを鎮圧するために君が描いた厳しい指針²⁶の完全実施によって、彼らの永久の改革への地ならしをする、という問題にも無関係ではないことだ。さもないと、グレイ卿の方針が冷酷だとか流血が過ぎるとかいったよからぬ注進のせいで、計画はすべて水の泡となり、そこに注ぎ込まれた費用も労力もすっかり無駄になって捨てられてしまいかねないからね。

26 「厳しい指針」については pp. 9-13 を見よ。

(グレイ卿の後任)

アイリニーアス まさにその通りだ。なぜなら、グレイ卿がアイルランドから本国に召還されたのち、二人の最高法官が短期間の後任について²⁷。そのうちの一人は（どうやら）前任者たちの「強硬な」やり方を踏襲するつもりであったらしいのだが、それを遮られ抑制された。しかし、もう一人のほうはその役柄にふさわしく穏健な人柄で、かの国の傷を治療して回復させようとしたのだが、必要とされる慎重さが足りなかった。彼らの後には、ジョン・ペロット卿²⁸が着任して（いわば）前任者の育てた作物を刈り取り、自分のやりたいことは何でも障害なくやることができた。その権限を彼は、前任の総督たちが目指した方向ではなく、むしろ前任者を蔑し自らの意見をひけらかすように、逆方向へと向け、思うがままに振舞ったのだ。というのも、ペロット卿はイングランド人を片っ端から踏みつけにして屈辱を与え、力の限りアイルランド人を立てて援助したのだ——そうすることでアイルランド人を統治しやすいように懐柔し手なづけようという意図からにせよ（その考えは大いに間違っているが）、あるいは後に一部明らかになったように、自分の別の目的を密かに企んでいた

27 総督は常にアイルランドに滞在するわけではないので、その不在中は、一人ないし二人の最高法官（Lord Justice）がその代行にあたった。1582年にグレイ卿が総督職を解任されたのち、この『管見』が執筆された頃までの間に、二人の最高法官と三人の総督（ペロット卿、フィッツウィリアム卿、ラッセル卿）が次々に任命されている。（Simms 487）「二人の最高法官」とは、ダブリン大監督のアダム・ロフトラスと、大蔵大臣のヘンリー・ワロップ卿であり、1582年8月25日から1584年1月7日後任のペロット着任までの間、暫定的にアイルランド総督職を務めた。

28 Sir John Perrot (1528-92) マンスター州長官 (1570-73) としてデズモンド伯の乱を処理。グレイ卿の後任のアイルランド総督 (1584-88) として、デズモンド伯の没収地へのイングランド人入植を進めることを主たる任務としたが、慎重さを欠き、ロフトラスをはじめとして多くの敵を作った。マンスター州長官職、アイルランド総督職ともに、自らの希望により解任。

からにせよ。ただ確かなことは、彼の統治のやり方は、前任者のものとあまりに逆行しているために、アイルランドという領土に関してまともとか健全とかいえるものではなかった、ということだ。というのは、それはまるで、二人の医者が一人の患者を、別々の時間に診るようなものだ、一人は患者の体を浄化〔浣腸〕して鎮静させる効果のある処方をし、もう一人はその体に与えるだけ与えて強化する。そんなことをすれば、もっとも危険なぶり返しが起こるに決まっているだろう？ グレイ卿の統治と、その後任の〔ペロット卿の〕統治に見られる、そういうことが、アイルランドに起こったわけで、アイルランドは今や以前よりも一層重篤な病状に陥っている。だから、いったんある方向で改革に着手したならば、その後は結果として伴うだろういかなる悲惨な光景を目にしたからといって、またその被害者に同情するからといって、後悔したり後退したりしないよう、状況を予見し不退転の決意を持ってしなければならない。その際、他のいかなる方法によっても彼らを矯正することは不可能であり、これらはこちらが望むからではなく緊急の必要性から行うものであることを理解しておくことだ。

（指揮官の腐敗）

ユードクサス　ここまでで君は駐屯軍を展開させ、その任務を指揮するという話まで進んだ。しかしながら、僕に言わせれば何か確実な方針を打ち出すなんて到底不可能だし、むしろ日々起こってくる状況に細かく対応するほかないと思う。しかし、（アイリニーニアスよ）、こういっては何だが、君の言うように用心深く将来を見通し、備えても、（おそらく）潜在的な悪というものがあって、よく調べないとこの重要な任務の希望をすっかり挫いてしまうかもしれない。それは、駐屯軍の指揮官の腐敗だ。というのは、駐屯軍を入念に配置し、その中隊（カンパニー）が十分な人員を備えていても、指揮官がその気になれば、除隊したい者を除隊し、危険できつい任務を自らの意思で去りたいと思う

者は帰らせることができる。それが（僕はよく知っているが）、兵士たちが駐屯しているときに通常行われる慣習なのだ。というのは常に万人の目にさらされている野営時に比べて駐屯中は怠慢を隠しやすいからなのだ。それでいて、上から給料が支給されてくると、（噂では）指揮官たちが（ここでいちいち挙げるまでもないが）百もの手管を弄してその大部分をほしだけ懐に入れ、そうやってしばしば配下の兵士を欺き、女王陛下に悪事を働き、事業を妨害している。だから、女王陛下がいかに十分な支給をされようが、兵員簿管理官がいかに熱心に視察しようが、国王代理や将軍がいかに厳しく監視していようが、指揮官たちは彼ら全てを出し抜くことができるのだ。だから、できればこの弊害を予防するべきだと思うのだが。

アイリニアス それはきっと至難の業だろうね。だが、その予防のために一番役立つのは、駐屯軍全体を統括する大佐²⁹がよく注意して、駐屯軍に異動があるかを監視し、傷病兵と戦死者の氏名と員数を把握し、日々任務につく兵士たちの隊列に注目していること、につきる。これによって彼〔大佐〕自身が容易には騙されず、その結果彼自身が特段の確実さと誠実さ・高潔さの人でいられるはずだ。だから、大佐の人選と任命にはよほどの慎重さをもってしなければならない。これに加えて、指揮官が兵士の給料の支払いをするのは何としても避けるべきで、それに代えて特別に信用のある給与支払係を任命して、指揮官の割符と、その隊の係官の帳簿とによって、兵士一人一人に給与を支払うようにすべきなんだ。そういうやり方によって、指揮官も自身の給料それっきり以外、確実に懐に入ってくるものがないとなれば、自隊の異動をごまかしたり、自隊を縮小したり、指揮下の兵士を騙したりしようと思わなくなるだろう。そしてこれこそがスペインの指揮官のやりかたで、指揮官は配下の兵士の給料に関わる必要がなく、配下の兵士たちのパガドーレ（給与支払係）と呼ばれるこ

29 大佐（colonel ここでは coronell と綴られている）は指揮官（captain）の率いる中隊（company）の集合である連隊（regiment）を統べる。

とを潔しとしないのだ。これに対し、わが国のやり方は正反対で、それが事態を最悪にしている。何しろどの指揮官も、60名を召集できれば自分の隊は十分だと考え、それで一年に500ポンドを稼げないやつは指揮官の肩書きを持つに値しない、などと豪語して憚らないのだ。そして彼らはそれをしっかり実証しているからね。

引用・参考文献

- Brady, Ciaran. "The Captains' Games: Army and Society in Elizabethan Ireland." Chapter 7, *A Military History of Ireland*. Eds. Thomas Bartlett and Keith Jeffery. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Calendar of the Carew Manuscripts, Preserved in the Archiepiscopal Library at Lambeth. 1589-1600*. Eds. J.S. Brewer & William Bullen. 1869; rpt. Nendeln/Liechtenstein: Kraus Reprint, 1974.
- Camden, William. *Annales Rerum Gestarum Angliae et Hiberiae Regnante Elizabetha*. A Hypertext Critical Edition. Ed. Dana F. Sutton. The Philological Museum. Web. 30 Nov. 2010. <<http://www.philological.bham.ac.uk/camden/1580l.html#artgreyagain>>.
- Cicero, M. Tullius. *De Officiis*. Ed. with trans. Walter Miller. Cambridge, Mass: Harvard UP, 1913.
- Gottfried, Rudolf. "Irish Geography in Spenser's *View*." *ELH* 6.2 (1939): 114-37.
- Hayes-MacCoy. "The Completion of the Tudor Conquest and the Advance of the Counter-Reformation, 1571-1603", Chapter IV, *A New History of Ireland*. Eds. T.W. Moody et al. Vol. 3, *Early Modern Ireland 1534-1691*. Oxford: OUP, 1976.
- Simms, J.G. "Principal Officers of the Central Government in Ireland, 1172-1922: Chief Governors, 1172-1922: (B) 1534-1800." *A New History of Ireland*. Eds. T.W. Moody et al. Vol. 9, *Maps, Genealogies, Lists*. Oxford: OUP, 1984.
- Spenser, Edmund. *A View of the State of Ireland Written dialogue-wise, betweene Eudoxus and Irenaeus, By Edmund Spenser Esq. in the yeare 1596*, James Ware, ed., *Two Histories of Ireland*. 1st pub. Dublin, 1633. Facs. Amsterdam & New York: Da Capo Press & Theatrum Orbis Terrarum, 1971.
- . *A Vewe of the Present State of Irelande. Discoursed by Way of a Dialogue betweene Eudoxus and Irenius*. E.S. Eds. Edwin Greenlow, et al. *The Works of Edmund Spenser: A Variorum Edition*. Vol. 10. Baltimore: John Hopkins, 1949.

———. *A View of the State of Ireland: From the First Printed Edition (1633)*. Eds. Andrew Hadfield and Willy Maley. Oxford: Blackwell, 1997.

———. *Selected Letters and Other Papers*. Ed. Christopher Burlinson and Andrew Zurcher. Oxford: 2009.

エドモンド・スペンサー『一五九六年、エドモンド・スペンサー氏によりユードクサスとアイリニアスの対話の形で書かれたるアイルランドの状況管見』水野眞理訳『文学と評論』第3集第2号 2002 (37-55)

———.『1596年、エドモンド・スペンサー氏によりユードクサスとアイリニアスの対話の形で書かれたるアイルランドの状況管見』(2) 水野眞理訳『英文学評論』第76集 2004 (149-81)

———.『1596年、エドモンド・スペンサー氏によりユードクサスとアイリニアスの対話の形で書かれたるアイルランドの状況管見』(3) 水野眞理訳『英文学評論』第80集 2008 (37-78)

———.『1596年、エドモンド・スペンサー氏によりユードクサスとアイリニアスの対話の形で書かれたるアイルランドの状況管見』(4) 水野眞理訳『英文学評論』第81集 2009 (11-39)

———.『一五九六年、エドモンド・スペンサー氏によりユードクサスとアイリニアスの対話の形で書かれたるアイルランドの状況管見』(5) 水野眞理訳『文学と評論』第3集第7号 2010 (47-66)

水野眞理「土地の力——『アイルランドの状況管見』」『詩人の詩人 スペンサー』九州大学出版会 2006 所収 (329-42)

松村・富田編著『英米史辞典』研究社 2000

田中英夫編『英米法辞典』東京大学出版会 1991

